俳句文学館

発行所
社団法人
俳人協会
東京都新宿区
百人町3—28—10
郵便番号160
電話（03）367—8621（代）
発行人　草間　時彦
定価　100円（送料別）
（年　1,000円　送料　300円）
振替口座
東京6—273番

俳句文学館紀要

第1号を刊行

研究論文六編選ぶ

対象を明治以降の近代俳句に

一昨年夏に発足された紀要編集委員会による「俳句文学館紀要・第一号・一九八〇年」が、このほど刊行された。協会員内外による六編に、資料紹介一編を加えた一四一ページにわたる研究論文集である。

俳人協会は、来年度五十六年には創立二十周年を迎える。

その俳人協会の目的として、俳句文芸の創造的発展とその普及を図り、もってわが国文化の向上に寄与することを第四条にあげている。この目的を達成するための事業として、第五条の一に、俳句文芸に関する調査研究および資料の収集とある。

この調査研究に関しての事業の一環として、このほど「俳句文学館紀要」（研究論文集）が創刊された。俳句実作に励む上で、広い視野を持つことも重要なことである。今迄のすぐれた先人の俳句遺産を研究して、自己の実作の質を高めてゆくという意義から、今回のこの紀要という企画は、十分役立つものとなるだろう。

紀要編集発行に際して、紀要編集委員会（岡田日郎・川崎展宏・清崎敏郎・香西照雄・佐藤和夫・沢木欣一・松井利彦・松本　旭・村松紅花・村山古郷）を二昨年の夏に設け、会議を重ねて計画を練り、協会員内外より広く原稿を募集した。

二十数名の応募の中より六編を選び、資料紹介一編を加えた。

今回第一号は、明治以降の近代俳句に研究対象をしぼった。将来は、古典俳句・俳人の研究も収録する予定だが、今後時期を見て、更に二号・三号とすぐれた研究論考をまとめて続刊することになっている。

希望者は頒価千円に送料二百円を添えて、必ず「俳句文学館紀要申し込み」と明記の上、俳人協会あてお申し込み願いたい。

紀要編集委員の沢木理事

【紀要第一号の内容】

○子規と拓川　室岡　和子
○宮城野の露—潤水と奥羽百文会　橋田　憲明
○静岡新俳句黎明史　田中あきら
○芭蕉と明治の虚子　丹羽　康碩
○子規　虚子その明暗　松村　幸一
○『評釈』のなかの秋桜子と素十　亀井　新一
○大須賀乙字が名和三幹竹に送った手紙　村山　古郷

文化功労者に汀女氏

主婦層への俳句普及の功績で顕彰うける

昭和五十五年度文化功労者には俳句からも一名が選ばれた。本会顧問の中村汀女氏である。俳句で選ばれた者としては初めてのこととも言える慶事である。

十一月四日、文部大臣より授与された顕彰状には、「貴下は文化の向上発達に関しとくに顕著な功績をあげられましたよって文化功労者として顕彰します」とある。

氏が、今日の俳句人口の隆盛、とくに家庭婦人層に広く俳句を普及させるにあたって、大きな影響力をもってきたこと、その点は衆目の一致するところであろう。氏も顕彰を受けた喜びのことばの中で「俳句をつくって、きた 家庭婦人と一緒に取りあげていただいたということでうれしい」と語る。

氏の俳句の特質は、明るく健康な家庭生活の実感、女であり母である主婦独特の叙情である。こういう現代俳句の一つの流れの推進者としてその功績は大きい。

なお、今回の顕彰の祝賀会は、各界有志と共に俳人協会もその発起に加わり、十二月四日（木）正午よりホテルオークラ平安の間で開催される。

（写真は文化功労者に選ばれた中村顧問）

地方の特色盛る優れた内容

『会津歳時記』出版祝賀会

会津歳時記出版祝賀会は十一月十六日午前十時から、会津若松市中央公民館三階ホールに約三百人が集って盛大に開かれた。桑原兆堂会津歳時記編纂委員会長の挨拶のあと、竹谷しげる同事務局長が編纂・出版にいたる経過を報告、出版の労をとった角川書店角川専務に感謝状と記念品が贈られた。

つづいて来賓の草間時彦俳人協会理事長が一立派な歳時記の出版で中央も大きな刺激を受けた。日本の各地でこのようなものが出来れば俳壇ばかりでなく日本の文化にも大きく役立つだろう」と祝辞をのべ、大野林火俳人協会長らの祝電を披露したあと祝宴に入った。

午後からは会津俳句大会を開き、講師の草間時彦氏が「旅の俳句・風土の俳句」と題して一時間半にわたり、感銘深い講演を行った。

【竹谷しげる報】

会津歳時記　B5判六百ページ
写真多数　頒価六五〇〇円　発行所　角川書店

桑原会長

竹谷事務局長

連盟の熱意に敬意

大野林火会長談

昨秋、会津俳句連盟大会に招かれた折、竹谷しげるさんから会津歳時記の刊行が進められているのを聞き、今日その刊行を見て、その立派で大規模なのに驚きました。俳句は風土に密着するものですから、地方の特色を生かした歳時記によって、会津の風土が見直され、会津在住俳人はもちろんのこと、会津を知るのに大変参考になりそうです。写真も豊富に使っており、会津に関する専門的資料にもなります。

会津俳句連盟の会員諸君のそのたゆまぬ熱意に心から敬意を表します。

俳句文芸の発展を期して

紀要編集委員　沢木欣一理事の話

今回のこの紀要を創刊することになりましたのも、俳句文学館に折角収集されました資料を基礎として、着実な研究が実を結ぶことを念願しての新しい企画なわけです。

おかげ様で、俳句文学の専門図書館としては、俳書二万冊、俳誌十万冊が収集され、分類整理の上閲覧者の便に供せられています。閲覧者も、地方や外国人の研究者等の利用があり延べ約五千名に達しました。

文字通りわが国唯一の俳句専門図書館としての機能を果たしつつあるといってよいでしょう。しかし、未だ整備途中にあり、今後協会員の皆さんの暖かい御援助無しには充実発展を期し得ませんので、一層の御助力を心からお願いします。

この紀要発行を機縁に実作者の俳句研究がますます発展し、俳句文芸の貢献に大いに寄与されることを希望します。

冬秋夏春

最近、海外、とくにアメリカで俳句が盛んだが、アメリカの俳句と日本の俳句の大きな違いは、日本の俳句が季の無償の行為であるのに対して、アメリカの俳句は金銭をかけた賞金俳句だということである。

アメリカの俳句雑誌を見ると、天地人のような格付けがしてあって、例えば天の句は開巻第一頁に全頁を使って印刷してある。そして下の方に必ず「賞金二十ドル」とか「賞金十五ドル」とか賞金額が書いてある。地の句になると一頁に三句ぐらい印刷してあって賞金の額は少し小さくなる。以下、人も同じ。つまり、アメリカでは俳句も金なのである。

日本でも雑誌の俳句欄とか俳句賞とか、賞金を伴うものがないわけではない。しかし、それらに応募する人は金が欲しいのではない。欲しいのは入選の栄誉である。金と名、これが日米の俳句観を分けていると言ってよい。

ところで、このごろの若い人が俳句をやらないのは、一つには俳句が金にならないからだと思う。今の若い人は、ゴルフでもマージャンでも、パチンコでも金になるものにしか興味を示さない。生活がアメリカ化し、意識までアメリカナイズされたのである。

今、私達は趣味でございますなどと言ってのん気に俳句を作っている。しかし、将来今の若い人達が大人になった時、私は日本でも賞金をかけて俳句を作るようになると思う。問題は発想の転換、いつ誰がそれをやるかである。

（高橋悦男）

十二月

柚子湯

若さとはブーツの歩幅揃ふとき　岸風三楼（市川）
松手入してをり大き足の見ゆ
熱き湯の相寄り離れ柚子ふたつ

栗

栗むきて吾は只今栗菩薩　楠節子（堺）
栗をむく奈落の底のあがきにて
栗をむく我武者羅といふ庖丁で

陰陽

人声は風をいざなひ十二月　長谷川双魚（岐阜）
食あたりして極月の陰陽師
しぐるるやおんへそおさめ筥の紐

第16回 関西俳句大会

俳人協会員でない一般のお方も参加出来ます。多数ご投句下さい。

投句　3句一組（雑詠・未発表に限る）
書式　普通の原稿用紙半面・句のあとに郵便番号・詳しい住所・姓号明記。
投句料　一組につき千円（切手代用お断り）幾組でも可。
投句締切　1月20日（消印有効）
投句先　〒665　宝塚市野上四丁目8の22　俳人協会関西支部振替口座神戸一八一六
選者　米沢吾亦紅・山本古瓢・山口波津女・山口草堂・山口青邨・山口誓子・森田峠・皆吉爽雨・水原秋桜子・見市六冬・堀内薫・福本鯨洋・土山紫牛・津田清子・鷹羽狩行・高木晴子・下村非文・佐野まもる・後藤比奈夫・草間時彦・清崎敏郎・亀井糸游・桂樟蹊子・大橋敦子・大野林火・大島民郎・浦野芳南・右城暮石・五十嵐播水・阿波野青畝・安住敦（五十音逆順）
賞　朝日新聞社賞・関西俳句大会賞・特選・準特選
大会　4月12日（日）大阪府中小企業文化会館　講演（題未定）細見綾子
◎選者数名により予選を行います。
◎入選句集を全投句者に一人一冊配布します。
主催　社団法人　俳人協会
後援　朝日新聞社

俳人協会主催 関西新年賀詞交歓会

好評につき、昨年につづいて新年の賀詞交歓会を行います。本部からは皆吉副会長と鷹羽理事が出席、福引もあります。多数ご出席下さい。ただし、出席は俳人協会の現会員に限ります。

予約制ですので、ご面倒ながら内金を添えて関西支部宛にお申込み下さい。なお、予約後のお取消には返金いたしかねますのでご了承願います。

日時　1月11日（日曜）午後5時より
会場　国鉄天王寺駅ビル都ホテル4階
形式　立食パーティー
会費　5千円
（予約）　会費の内金2千円を12月20日までに左記宛お送り下さい。

〒665　宝塚市野上四丁目8の22
俳人協会関西支部
TEL〇七九七—七二—九七七二
振替口座　神戸一八一六

多久聖廟秋の釈菜吟行
佐賀県支部で例会

俳人協会佐賀県支部秋の例会は十月十八日多久聖廟の釈菜を吟行した。

多久聖廟は日本で一番古い聖廟で、建物も完全に保存され、国の重要文化財に指定されている。釈菜は孔子の命日と言われる四月十八日と半年後の十月十八日の春秋二回に行われ、十八世紀初頭の創建当時より今日まで絶えることなく続いており、祭式は典籍の定めにより純然たる中国式で雅楽吹奏裡に厳粛に執行されるのである。

祭官の服装もいわゆる唐様で、雅楽も越天楽や抜頭などが奏された。この日は各地から大学教授や漢文学研究者なども多数参列されていたが、会員も廟内のいい席で拝観できて満足のようであった。

ちょうど正午頃釈奠は終了した。その頃から生憎雨が降り出したので車を駆って会場の富亀和へ急いだ。

出席者は、県多須良・後藤圭秀・宮田春童・筒井塔子・百崎つゆ子・吉田きよみ・木下鳴子の七氏に、地元でお世話をいただいた樋渡吐月氏を加え、早速句会を開いた。

句会終了後直ちに懇親会に移り、杯が回るにつれてなごやかな歓談がつづいた。

次回は鹿島の桜まつりを吟行することにしてはという意見が多かった。

午後四時過ぎ散会した。

（筒井　塔子報）

広島馬酔木会に
第1回広島文化賞

広島県では、県民の幅広い文化活動に対して経済的に援助することにより、心豊かなうるおいのある地域社会の創造に寄与しようという目的で、昭和五十四年三月に財団法人広島文化振興基金が設立され、その第一回の広島文化賞がこの十月二十一日に個人（副賞、二〇万円）十一名、団体（副賞、五〇万円）四団体に授与された。

賞の対象は美術・音楽・文芸（小説・詩・短歌・俳句・川柳ほか）民俗芸能・総合文化部門に分かれ、文芸部門（俳句）で「広島馬酔木会（会長・宮原双鬱・馬酔木同人・俳人協会広島支部長）が団体の部で受賞した。

翻訳
吉田洋一

翻訳本の第一章をよみ始めたら「私は」「私の」「彼は「「彼の」」がやたらに出てくる。うるさいので片っぱしから消してしまった。ただし、「……した私は」とあるのは「私は……したので」と直して「私」を残したところもあった。「……」は一行半にもわたるのさえあるのである。

こうして掃除をしてみたら前よりはだいぶ読みやすくなった。しかし、全巻にこんな作業を施すのはたまったものではない。翻訳本は売りとばして原書を買ってきたら、すらすら読める名文なのである。

いま挙げた本の翻訳者は日本語を習得し直す必要がある。その習得の一部として作句をすすめたらどうかしら――私はいまそんなことを考えている。

（一九八〇・一一・一〇）

第20回俳人協会賞
第4回　新人賞
対象作品

（昭55年10月21日～11月18日）

著者名	書名
高山　四宇	雲煙生葉
横溝　養三	鱚の顔
中村きみ子	十三夜
宇咲　冬男	乾坤
本川　晴代	校庭
田崎　賜恵	涅槃図
渡辺春天子	風城
青木よしを	青木よしを句集
岡本　春人	四月馬鹿
門脇　白風	説夢の詩
中山きりを	氷滴

昭和二十六年水原秋桜子主宰の「馬酔木」俳句の発展と伝承を目的として設立されて以来、機関誌「早苗」を通巻で三八一号発行するなど会員の創作活動を通じて地域文化の振興の貢献が認められた。

（宮原　双鬱報）

【対象作品追加】
伊藤　京子「風　花」
小山田花水「竹涼し」

秋田で全県俳句大会

秋田魁新報社主催の第53回全県俳句大会は十月二十六日、秋田市文化会館で開催、講師の鷹羽狩行氏は「季節の心」について講演した。出句三百七十人。

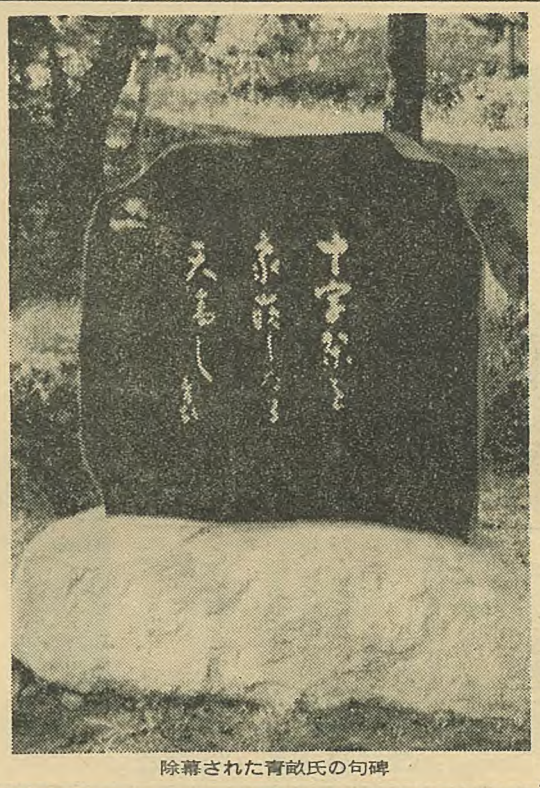
（安藤五百枝報）

猿田氏の句碑建立
茨城・瓜連町に

俳誌「梅香」創刊十周年を記念して、主宰者、猿田禾風氏の句碑が建立された。茨城県那珂郡瓜連町の静神社でその建碑式が、九月二十七日、関係者約百五十人の出席のもとに行われた。

句碑は高さ一六〇㌢の立派な黒みかげ石で、「二の宮や天平反りへ花の風」と叙情豊かな逸品が刻まれている。

猿田氏は、芭蕉以来の叙情派伝統を守る正統派の俳人として知られ、現在、門弟も県内外に八支部二百五十人にのぼっている。



除幕された青畝氏の句碑

トラピスト修道院に
青畝氏の句碑

北海道上磯町当別のトラピスト修道院前庭に、俳誌「かつらぎ」主宰の阿波野青畝氏の句碑が建てられた。

十月二十六日、除幕式が行なわれ、青畝氏ご夫妻はじめ、お孫さん等四人、関西、東京、道内からかつらぎ俳人八十名が参加した。五十三年十月六日道南吟旅の際この地に来遊された

十字架を象徴したる天高し　青畝

の句である。

同修道院には、丘踏青神父がかつらぎ同人としており、カトリック信者である青畝氏の句碑建立の運びとなった。（阿部薫月報）

会員賀詞交歓会ご案内

恒例の俳人協会会員賀詞交歓会を次の通り行いますので、おさそいあわせてお出掛け下さいますようお待ちします。

一、日　時　昭和五十六年一月十二日（月）
　　午後二時～四時
二、場　所　俳句文学館
三、会費は不要です。

社団法人　俳人協会

第五回岩手県俳人協会員
新年の集い

期　日　昭和五十六年一月十一日（日）午前十時三十分より
場　所　盛岡市大沢川原三丁目五―二〇「こずかた会館」
講　師　俳人協会理事　古舘曹人
句　会　一、当季雑詠三句を当日持参して下さい。
　　二、短冊交換会を行いますので各自一枚持参して下さい。
懇親会　句会に引続き恒例の新年懇親会（昼食含む）を行います。
その他　当日「昭和五十五年度会員作品集」を配付します。
連絡先　〒020盛岡市八幡町一―一九
　　小原啄葉
　　（電話〇一九六―二二―三六七七）

図書寄贈者

（昭和55年9月11日～11月18日
整理済図書　敬称略）

村上梅泉・青葉図書・皆川白陀・飯野遊汀子・稲田雷青・小阜川錦樣柏・宇佐美魚目・吉田未灰・吉村信子・桂樟蹊子・高橋麻男・手塚深志城・小沢遊湖・杉田井蛙・森本巽居・伊藤てい子・乾鉄片子・木原とも・工藤節朗・鳥越すみこ・蓬田代宇・山口同人句会

京都俳句作家協会・梶井枯骨・砂井斗志男・小笠原丘波・石原舟月・石川笠甫・井上鷄平・小口白湖・小田切清光・柏禎・栗山渓村・東京美術・菅原関也・新潟俳句会・関口真沙・立石朋木・東郷瑞穂・友常玲泉子・西山禎一・魚影社・村上韻昇・漂茎社・金子晋

青江涼江・未至廣勝子・磯野堯人・今井八重子・大津信子・奥山東風・遠藤梧逸・秋山黄夜・桑山麦門・和田茂樹・依田由基人・志田喜代江・瀬田きくよ・下村非文・田川飛旅子・西鷹鳳城・田中青坡・永野採柳・橋閲石・長谷川茗草・草間時彦・佐賀同人俳句会

松本青風・三上北人・吉田チヨノ・武田恒明・渡部彬晃・宇田零雨・斎藤優二郎・佐野香都・石鍋静穂・水原秋桜子・伊藤文緒・明治書院・窪田薫・俳人協会・土山紫牛・立風書房・旧れもん20才代研究会・田所昌之・前田是空・永田泰嶺・竹内一笑・草野戒朗

福島県浜通り俳句協会・山田みづえ・斎藤夏風・黒沢宗三郎・大場美夜子・伊藤京子・中村美保子・小田禾陽・松井ひで子・小山田花水・金子兜太・境入奎太・高木晴子・創士社・渡辺黙水・高山四宇・青木よしを・佐野千遊・秋山淡遥・田崎賜恵・横浜同人句会

角川書店・渋柿社・戸村羅生・塚本久子・川崎俊子・中村きみ子・村上一鳥・村上喜代子・横溝養三・渡辺春天子・宇咲冬男・岡本春人・風間幾子・本川晴代・鳥崎秀風・雲母神戸支社・会津歳時記編纂委員会・杉山芳之助・五井若州・古賀登・立岩利夫・京滋会

富山県俳句連盟・土曜発行所・難波筍子・火屋俳句会・瓜生敬一・現代俳句協会・対馬憲子・ワタナベリョウヘイ・豊山千陰・中村素径・豊山俳句倶楽部・宇留田銀香・春日やす代・みちのく発行所・板山朱系・木内白生・塩崎月穂・千代田喜彦・原田種茅

門脇白風・長井俳句会・瓦井律・西幾多・安住敦・田所昌之・鈴木昌之・野口里井

俳誌ご寄贈の御礼

前号に一次の俳誌を探しています」のお願いをしたところ、次の諸氏からそれぞれ多数の俳誌のご寄贈を頂きました。

横山双風氏　氏家夕方氏　田中敬治郎氏　笠原若泉氏　藤田旭山氏　飯田藤村子氏　菊池麻風氏　渡辺梅郷氏　石垣辰生氏

頂いた俳誌は「季節」「石楠」「いそな」「かつらぎ」「東山」「早春」「俳海」「虎落笛」「くれなゐ」「草」「鹿火屋」「風花」等で、ここにその号数を詳記する余裕はないので割愛させて頂くが、「風花」は全巻完備し、その他欠号分を大幅に補充することができたことはありがたく、厚く御礼申し上げます。今後ともご援助のほどお願いいたします。

（村山）

俳人協会編「俳句カレンダー」
昭和五十六年度版の頒布について

一、体裁　月別　十二枚綴り壁掛用。
一、内容　林火。草田男。春一。敦。青畝。風三楼。爽雨。綾子。秋櫻子。立子。青邨。悌二郎。曹人。誓子。汀女。（月順）の揮毫色紙・短冊のほか協会作家　二百七十名余の俳句掲載。
一、頒布　一部　一、〇〇〇円（協会渡し）
一、送料　一部　全国一律　三〇〇円

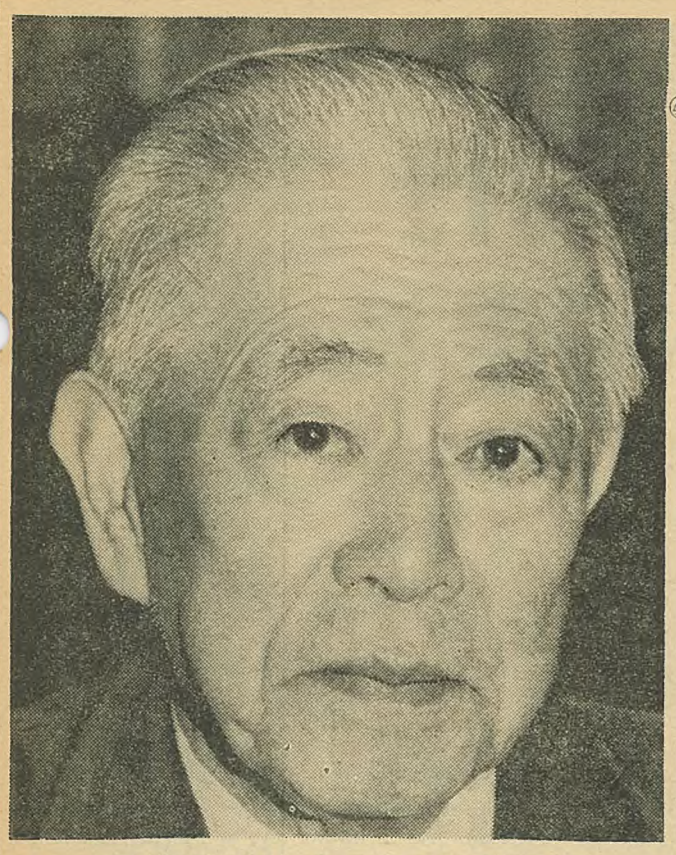
地帯／部数	二部～三部	四部～七部	八部～十部
第一地帯	五〇〇円	五八〇円	六六〇円
第二地帯	六五〇円	七三〇円	八一〇円
第三地帯	八〇〇円	八八〇円	九六〇円

何れも荷造費一〇〇円加算してあります。十一部以上は運送屋に委託。発送は自動車及国鉄を使用いたします。

好評発売中

申込先　各位所属の発行所、やむを得ぬ方は、当協会カレンダー係

顔㊵
米寿迎えさらに壮健
柳田静爾楼



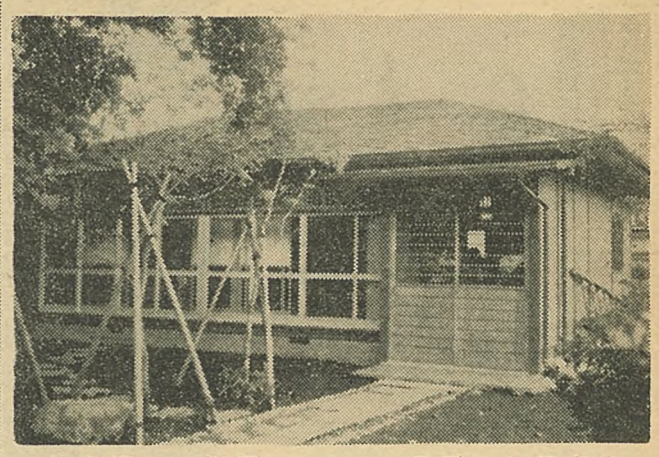
俳句文学館の建設に際し、角川源義委員長の立場は、当初仲々に微妙なものがあった。俳壇の常識を超えた構想雄大な計画に誰もが尻込みし、理想はともかくとても実現不可能とする人ばかりであった。角川さんの心命を賭した熱意にまず心動かしたのが富安風生翁であった。率先自ら広く政財界への協力要請の先頭に立たれた。とともに、俳人協会強化のため、柳田静爾楼氏を強く推された。その時、風生翁は、俳句文学館の基礎を鞏固とするため、是非とも貴方の力をかりたいと、固辞する柳田さんを口説きに口説いたと聞く。

晩学の俳句は、日本航空社長時代に田村桃園さんの霜月会に拠り、親しく風生翁に学ばれた。風生先生の人間的深みに教えられるところ多かったと今に述懐する。文学館への献身は、亡き風生先生への恩返しでもある。

その昔、一高の寮生活では、高野素十氏と二年間同じ部屋で寝起きし、すこぶる仲良しであったという。後年その素十さんに、霜月会の合同句集を見せ、静爾楼俳句習見を乞うたところ、そうだな、二つくらいは、一すうまいのがあるかな、と評された由。楽しみの俳句に徹した一面である。

この春、米寿の賀を迎え、ますます壮健の柳田さんである。

文・山崎ひさを
写真・高村圭左右



青邨旧居を移築保存

盛岡　句会などに開放

盛岡市愛宕町にあった山口青邨先生の旧居が、市の配慮により同市愛宕町中央公民館の庭園内に移築保存され、今年四月二十九日より開放された。

移築先の中央公民館の庭園は江戸前期盛岡城の薬草園だったところ。後に明治四十年ごろ南部家別邸として建物とともに造園された池泉回遊式庭園であり、市民の憩いの場所となっている。

青邨先生が少年時代を過された旧居は、この庭園の真く隣接地にあったもので、庭園周辺は先生の幼いころの遊び場でもあった。

庭園内には一昨年岩手夏草会によって建てられた「遠山のくつがへるさま郭公鳴く」の青邨句碑や、原敬ゆかりの茶室「白芳庵」もある。移築された青邨旧居は、日本庭園によくマッチした木造平屋建ての質素なたたずまい。盛岡市によって「愛宕亭」と名づけられ、俳句会をはじめ歌会などにも開放されており、すでに利用者が八百名を超えている。

毎年鮭の遡上してくる中津川もこの近くを流れており、橋の上からは、青邨先生が「遠山のくつがへるさま……」と詠まれた南昌山も眺められる。（小原啄葉記）

（移築保存された青邨旧居）

皆吉氏の大阪句碑建つ

豊国神社境内に

雪解主宰皆吉爽雨の喜寿、叙勲と雪解四〇〇号を記念して、爽雨俳句の故郷ともいうべき大阪に句碑（写真）が建った。

彫句『刻々に大秋晴となる如し』が十月二十六日正午、大阪城内豊国神社境内で、令孫皆吉司君の手によって除幕。石は小豆島産、高さ二㍍、重さ五㌧。

全国よりの参会者は四百名。代表選による句会のあと、天主閣主任渡辺武先生の講演「大阪城の謎」を興深く聴いた。なお、六時より大阪ミヤコホテルで二百名が祝賀晩餐会に歓を尽した。

（尾亀　清四郎報）

55年度新入会員

55年11月19日現在

東京都
中村牧陽（故郷）伊東肇（若葉）
小島花枝（同人・狭汀）

神奈川県
乾桃子（鷹）菊池輝子（草紅葉）

茨城県
仙波きよし（年の花）

栃木県
村本泉水（春嶺）

静岡県
石渡青水（蓼仲寺・曲水・風土）
和久田隆子（笹）

愛知県
大竹正泰（林苑）近藤ますよ（林苑・圓）

大阪府
田中千代子（天狼）

京都府
山田耕子（京鹿子）早川紀水（京鹿子）

兵庫県
河合照子（南風）広瀬季見子（南風）

島根県
東田紫峰（南風・城）

広島県
森川泰雄（浜・星）伊藤三峰（浜・星）
菊池緑醤（渋柿）

山口県
大下健二（自鳴鐘・群蜂・天狼・颯）

愛媛県
得能節子（浜・星）

福岡県
林加寸美（万燈・ほととぎす）

富山県
泊康男（風）

岩手県
泊康男（風）

常寂光寺境内に建てられた高桑氏の句碑

高桑氏の句碑建立

洛西の古刹常寂光寺に

俳誌「嵯峨野」主宰者、京都市文化功労者高桑義生氏の句碑が、洛西常寂光寺庭園に建立され、十月十九日（日）同人誌友ら一七〇名が参集し、盛大に挙行された。

当日はあいにくの雨で、義生氏も病臥欠席となったが、東京から村山古郷氏を迎え、建立委員長土山しげを氏らが雨中の句碑に五彩の散華をし、盛会裡に終了した。

句碑は、

落葉ふんで道新しくひらけたり

の句で、一・五㍍の巨大な自然石に彫られ、常寂光寺の幽寂の横間に深い趣きを添えている。

三原で松野夫妻の比翼句碑除幕

十一月二日、広島県三原市の名刹妙正寺境内に、さいかち前主宰松野自得、現主宰松野加寿女両先生の比翼句碑が建立され、秋晴れのもと三原市長以下参列者は九十余名を数える盛大な除幕式が挙行された。

ゆきあいし人の面に春の月　自得

散りやまぬ花のいのちをてのひらに　加寿女

（田中水桜報）

伊予の魚

吉野　義子

伊予の魚といえばまず桜だい。たい漁の歴史は古く漁場も多い。明治年間には一網に数万匹も漁獲したとか。大浜八幡神社には藩主松平氏のたいの俳句が奉納されている。たい料理ではまず姿作りであろう。活作りの舌さわりは伊予ならではの味い。酒蒸、粗だき、うしお汁、たい飯、たい茶。浜焼だいは江戸時代からつづき今も各地に発送されている。

伊勢えび・車えび・芝えび・あわび・ささえは南予の特産。えびの活作り、塩焼。湯掻いたばかりのあわびやささえを潮風に吹かれながら手掴みに食べるのも、大きなボールに泳いでいる芝えびのおどり食いも、海辺ならではの趣であろう。

すずきの洗い、こちの刺身、子あじのにぎり、さわらの柚子蒸しなど、伊予の魚のきめこまやかな繁りは潮の速さと、海底の起伏の荒々しさによるのだとか。そのほかめばる、きぞ（べらのこと）ほご、はぎ、さより、きす、とらはぜ、つばくろなどがある。めばるは竹の子眼張といって筍の季節がとくによい。きぞは熱帯魚のように美しく塩焼きに、空揚に、「さつま」に。「さつま」はきぞを一度焼き、摺鉢でみじんにつぶし焼味噌とあわせ、煮汁の出し汁でこんにゃくやごぼうととろりと仕立てた郷土料理。南国の夏の味覚をそそる。子供のころ家族ぐるみで舟遊びを楽しんだものだが、釣舟で釣った魚を舟頭さんの料理でたらふく食べ、無人島に舟をつけて泳いだ想い出など、空と海の青さとともに今も心に焼きついている。

瀬戸で一番おいしい魚は何といってもおこぜであろう。刺身、ちり、揚物、たいよりも珍重がられていながら、なぜあのように見憎い顔をしているのであろうか。魚ながらもあわれに思われてならない。

小魚ではしろうお、いかなご、子いわしなど。いかなごはおろし大根で、子いわしは半乾きにして炭火で焙りながら、生姜醤油で食べるとまことにさらりとおいしい。料理上手な母は、生きのよい子いわしを薄塩で漬け込み塩辛を作っていたが、なかなか乙な味いでいかにもすぐれている。こんなことを書いていると、美食の酒好きの父と、禅と胸を張った母が今そこにいるように思えてならない。

☆　☆

創刊号物語〈37〉

ぬかご

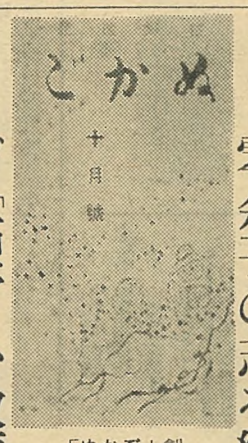
前野　雅生

「ぬかご」の前身は、大正十年十月に長谷川零余子が創刊した「枯野」である。立体俳句を標榜して、一時その誌勢は「ホトトギス」と天下を二分する勢いを見せたが、昭和三年七月、零余子は志半ばで急逝した。この結果、「枯野」をいかにすべきか、零余子の遺業をどう継承するかが大きな課題となり、未亡人長谷川かな女と水野六山人との間で幾度も相談が重ねられた。六山人は当時東京弁護士会の会長を勤め、また実業界にも幅広く活躍中で、「枯野」経営に、つとに零余子の信任が厚かったのである。

「枯野」継承問題は六山人の決断と実行力による結論が全員の承諾を得るところとなった。すなわち、三年九月号の「枯野」を「長谷川零余子追悼号」とする。十月号をもって「ぬかご」と改題し、続刊継承することとなった。因みにぬかごは、零余子の読みであり、故人を欽慕するための改名であった。

「ぬかご」の主辞には水野六山人が就任、運営一切の責任を負うこととなり、雑詠選者に長谷川かな女を擁して、旧「枯野」人全員あげて新生「ぬかご」に結集したのである。

「枯野」九月号には、「『枯野』改題『ぬかご』続刊に就いての宣明」が掲載され、零余子の遺業を、かな女を中心として新しい誌名の下に発展さすべき趣意が公表された。宣明には誓盟した主要同人として、神野溪石・三浦一竹・渋木三恩・佐野堤魚子・高木楽石・亀井初九・開原冬草・大原宏堂・高木丁二・小松原秀峰・福田太郎・安藤姑洗子の名が掲げられていた。



「ぬかご」創刊号の表紙

零余子の志を継ぎ「枯野」を改題

そしてこれらの人々を中心に、昭和三年十月、「ぬかご」改題第一号たる十月号（第八巻第十号）が発行されたのである。表紙は森田恒友の彩筆になり定価五十銭、府下淀橋町の旧枯野社すなわちぬかご社から発行された。

雑詠は長谷川かな女選、生活を眺ふ（第二雑詠の型となった）欄が水野六山人選、俳句入門欄が安藤姑洗子担当、その他課題選者による課題句欄の他、芽柳会、林檎会、昭和俳句会、帝大俳句会はじめ全国三十を越える各地句会報、そして論説には姑洗子、高木丁二、西崎鳥骨等が執筆している。

しかしこの十月号配本寸前の九月十二日、失火によるぬかご社（長谷川家）全焼という思わざる事態に遭遇した。ここにおいて六山人は急拠その前後策としてぬかご社を丸の内にあった自分の法律事務所内に移し、新しいぬかご社から十月号を発送、十一月号の編集に着したのであった。この決断と実行に幸いしたものは、焼け跡から発見された読者カードと、十一月号原稿の一部であった。このため一時は休刊を覚悟した十一月号も遅なく発行され、あまつさえ、かねて零余子の悲願でもあった発行所丸の内進出を果たす結果をもたらしたのであった。

ここに「ぬかご」の新体制のスタートが切られ、現在に至る五十余年、幾多の変遷を経て昭和五十五年、創刊六十周年という歳月を刻んだのである。

『俳句かるた』三部作
（各句解説付）
① 山口　誓子鑑修　俳句文学館編著
「動物俳句かるた」　一、二〇〇円
② 水原秋桜子鑑修　俳句文学館編著
「俳句いろはかるた」　一、六〇〇円
③ 山本　健吉選著
「百人一句、古今名句百選かるた」
（別冊解説付）　五、八〇〇円
※対象はそれぞれ①小学生中心 ②中学生中心 ③高校生以上を想定しています。幼児から一般愛好家まで楽しめる名句、佳句集です。
送料は実費とします。
申し込み先
〒160 東京都新宿区百人町三―二八―十
俳句文学館　俳人協会出版部
振替　東京　五―五二七七

現代俳句選集第六集　頒布中
◆俳人協会員四千余名による俳句の集大成。
◆総ページ千四百頁
◆俳人協会の歩み、作者別索引収録。
◆定価、上・下一セット六七〇〇円　送料　実費
◆申込先　俳人協会　（振替　東京六―二七三）
〒160 新宿区百人町三―二八―一〇
社団法人　俳人協会
電話　〇三（三六七）六六二一～二

大野林火監修
俳句文学館編
入門歳時記
角川小辞典＝30
◆定価一六〇〇円
◆初心者のための俳句歳時記の決定版!!
◆すべての例句にルビを施し、俳句を読みやすく親しみやすいものにした。
◆五十音順総索引により、本題及び傍題、解説文中の季題など二五〇〇語の検索が可能。
角川書店
〒102 千代田区富士見二―十三―三

俳句カレンダー鑑賞

第十九句集『餘生』所収。昭和四十九年冒頭の作であり、句集名となったものである。

四十八年九月に心臓発作におそわれ、九死に一生を得たわけで、そうした心境をあますなく伝えてくれる。心境句であるとともに事実に即した重みをずしりと感じさせる。

「なすことあらむ」は「なすことのあり」と同じ意に解して良いであろうけれど、それは義務的でのしらべではない。「あらむ」とおおらかに打出してむしろ強い断定、決意が秘められたとみるべきであろう。実際にその後の作品には壮者をしのぐものがある。

〈十二月〉

余生なほなすことあらむ　冬いちご

水原秋桜子

沈痛なひびきを伴う。秋桜子本来青春の過ぎにし心苺食ふ

という『葛飾』の句の詠嘆には、生活の安定、充実がうかがえるが、

寒苺われにいくばくの齢のこると、戦後すぐ詠まれた句では、色彩の好みを鮮烈にし、焦躁をかくさないはげしいものであった。秋桜子が寒木瓜をよなく愛することからも、寒苺を愛でる気持を想像できよう。そのほか追憶を誘うものがあるに違いないが、寒苺の色には生命の激しさを感じさせるものが確にある。

九死に一生を得た思いも、また新たな生命のみなぎりを覚えさせるであろう。この句は寒苺ではなく冬苺であることが、張りつめた思いとは別の余裕と明るさを感じさせる。即ち秋桜子生涯の俳句の本質、俳句への姿勢を、はからずもこの句に見ることができる。

市村究一郎

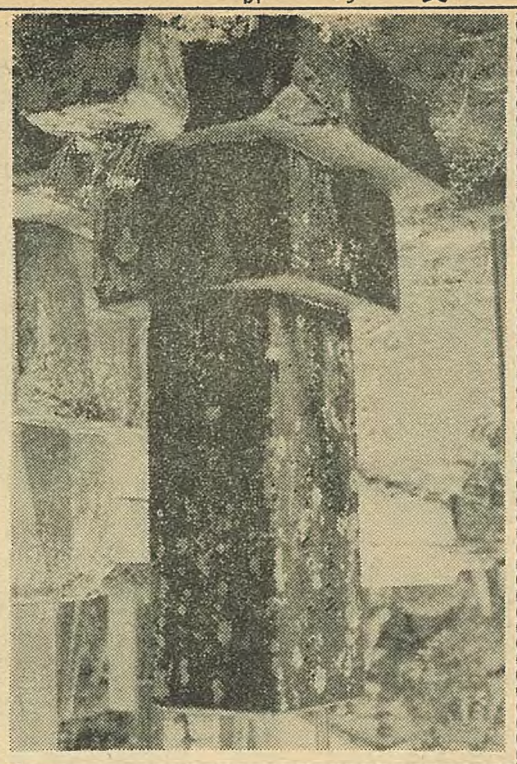
吉沢卯一氏に
北日本新聞文化功労賞

「馬酔木」同人、俳人協会評議員の吉沢卯一氏が本年度の北日本新聞文化功労者に選ばれ十一月三日の文化の日、富山市の北日本新聞社五階大ホールにおいて受賞式が行なわれた。

昭和九年、京大入学間もなく馬酔木に入門以来四十五年、馬酔木俳句一筋に歩み続け、昭和三十二年に富山馬酔木会を結成、いらい後進の指導に当たっている。五十年十月、県俳句連盟結成に当たって、推進者の中心となり、温厚誠実な人柄から会長に選ばれ、熱心に基盤作りに尽力され、結成後は毎年、春の俳句大会、秋の吟行会、そして年一冊の句集の刊行等、県俳壇の発展に努められた。

（熊田鹿石報）

吉沢　卯一氏



黒田桜の園氏が
泉鏡花記念「金沢市民文学賞」受賞

菊薫る十一月十一日、第八回泉鏡花記念金沢市民文学賞の贈呈式が、金沢市の石川県社会教育センター講堂で、文学を愛好する多くの人達が参加して催された。

「句集三面鏡」受賞の選者経過に次いで、金沢市長より賞の贈呈が行われ、受賞の挨拶で桜の園氏は喜寿のよろこびの上に、なおこの賞を与えられ嬉しさひとしお身に泌みて有難いとお礼を述べ、葉鶏頭の別名「老少年」を引き合いにして、余生なお少年のように腕白振りを発揮して作句に、絵画に、文章に励むとの所信を披瀝された。

この賞で俳句部門から選ばれたのは初めてであり、この快挙に俳句愛好者はおしみない拍手を送った。特に桜の園氏を金沢馬酔木会の会長に戴き、直接指導をうけている会員一同はわが師の受賞を心から喜び合った。

（中出霎彦記）

草を歩く
〈8〉《榎本星布尼》

榎本星布尼の墓は八王子市の大義寺にある。都の旧跡になってはいるが、墓そのものが特別に扱われている風はない。本堂の手前左側に、史跡指定のプレートと共に、墓は立っている。

八王子の横山に生れた星布尼は、はじめ俳諧を鳥酔に学んだが、鳥酔の後は白雄に師事し、天明から化政期にかけて活躍した女流俳人である。

「俳句」は昭和五三年八月号に近世女流俳人特集を編んだが、その中で、矢島渚男氏が「榎本星布尼の秀句」を書いている。また、そのころ山本健吉氏にも「榎本星布尼のこと」という文章がある。山本氏も言っているように星布尼の句集は、日本俳書大系本にも古典俳文学大系本にも収録されていない。

勝峯晋風編「閨秀俳家全集」には収録されているそうだが、たやすくこれを巷間に見ることは不可能である。

矢島氏や山本氏の引用されている作品を見ると、なかなかに感性あたらしく、近世俳人の中では、卓越した女流作家と思われる。文化一一年一二月二八日没。享年八三。墓の側面には「咲花もちれるも阿字の自在かな」の辞世の吟が刻んである。

（大義寺・国電八王子駅北口下車、八王子市元横山町三六）

【写真と文・星野麥丘人】

俳人協会・俳句文学館年末年始予定

十二月二十三日（火）図書室閲覧納め
十二月二十六日（金）仕事納め
一月五日（月）　仕事始め
一月九日（金）　図書室閲覧開始
一月十一日（日）　関西賀詞交歓会
一月十二日（月）　会員賀詞交歓会（午後二時～四時）

管理能力と俳句指導

石塚まさを

職場においての管理能力とは、その職場に所属する人達を如何に適材適所に配置するか、また一人一人の特質を活かし、好いところを伸ばし、悪いところを矯め、職場を一つの輪として、明るく保ってゆくことによりその職域の発展に寄与することであろう。しかも、前記の好い所を伸ばすことは比較的に容易であるが、悪しきを矯めるには極めて慎重でなければならない。

どんな職場にも極めて仕事に精通した所謂能率型に属する人がいるが、これは管理者とは別なタイプに属する。このことは、俳句に当てはめても同じことがいえると思う。俳句がどんなにうまくても指導性に欠ける人があり、また、俳句はあまりうまくなくても指導性に勝れた人がある。前者に属する人が人を指導すると、概ね己れの型にはめ、外に出ることを許さない。この方法は極めて安易な方法ではあるが、指導される側にとっては極めて不幸なことである。

その人その人の特質を捉え、それに応じた指導をしてゆく。つまり、その人の親芽を伸ばし、脇芽を摘んでゆく、これが指導の大道であろう。古い指導者の中には、ともすると前者の型に属するのが多い。

この弊を正すため、俳人協会などで、研修講座を設けて、俳句のあり方、教え方等についての試みがなされているのは極めて当を得たことだと考える。

最近私も一研修生として、この講座の一日聴講者となる機会をもったが、多分に得るところがあった。

本来的な指導者養成のためにも、この種の試みは今後引続いて行われることは極めて大切なことであると思う。

これは、俳句の将来にもつながる問題であるからである。

記念大会の会場風景

にぎやかに祝賀の会

山茶花四百号記念大会

昭和二十一年九月、故田村木国によって復刊せられた山茶花は、順調に発展の一途をたどり、昭和五十五年八月号を以て四百号を迎え、十月十日、大阪・都ホテルで盛大な記念大会が催された。

来賓の祝辞、花束贈呈に続いて、主宰下村非文から「今後とも花鳥諷詠、客観写生を信条とし、実作を主として進みたい」との力強い挨拶があり、そのあと、犬養孝博士の「万葉のこころ」と題する記念講演が行われた。

なお、休憩の後同所において祝賀懇親会が賑やかに開かれて、午後六時過ぎ閉会した。

菁々子の永年の創作活動と後進の指導、さらに矯正施設での指導や少年少女俳句の普及、並びに西日本の風土を集大成した「西日本歳時記」の編集などの広範な活動が高く評価されたものである。

表彰式は十一月一日、西鉄グランドホテルで行われたが、十一月十三日には西日本新聞会館国際ホールで、福岡市文化連盟主催の祝賀会が盛大に催された。

（岡部六弥太）

謹悼

次の方々が物故されました。謹んで哀悼申し上げます。

昭和54年
友田泰之（10・20）冬野・春燈

昭和55年
得田秋扇（3・26）馬酔木・鯱
黒木爽岳（8・22）年輪
高山　勝（9・11）新川
藤岡閑路（9・11）鹿火屋・好日・花野
川下重岸（9・24）馬酔木・榛柏
東條樹々（10・13）若葉
矢野蕚女（10・19）若葉・岬
竹田晶洞（10・27）風
本山邑多（10・27）若葉
米住三丘（10・30）麦秋
関　梅春（10・31）萬緑・幸野
吉見泰二（11・6）鶴
杉野耕人（11・7）春嶺
丹羽　卓（11・8）萬緑・鏡野
橋本月登（11・11）萬緑

ギャラリーだより

西村青雨
第六回墨彩画展

とき　昭和56年1月7日（水）～15日（木）
ところ　長谷川画廊
中央区銀座7～11～11
電話五七一～一四六二

編集室から

▽…本年度最終号をお送りする。もっとも五十六年正月号は年内に発行する予定である。

先月号の本欄に書いた真夜について、各方面よりご教示を頂いたことを厚くお礼申し上げる。ついては、昭和十年以前に真夜という言葉を使った俳句があったら是非お教えを頂きたい。重ねてお願いする次第である。

▽…先日、会津若松での『会津歳時記』の出版記念会に行って来た。別欄の通り、まことに見事な地域文化の結晶ともいうべき業績である。本協会員で福島県で出身者は是非とも座右に置いて頂きたい。

会津地方ではモズの贄が枝の高いところにあるときは雪が多い。冬眠の蛙が地中深く睡るときは冬が深いという。今年はその通りなので、雪が多いだろうといわれた。磐梯山の新雪がきれいだった。

▽…コラムの「春夏秋冬」を半年間で担当頂いた高橋悦男さんは今年で終わり、来月からは金沢の井上雪さんにお願いしてある。井上さんは最近出版の、朝日新聞社ノンフィクション『廓のおんな』の著者。俳句のほかに文筆でもご活躍の女流。高橋さんにお礼申し上げるとともに、井上さんの麗筆を期待する。

（草間）

昼の湯にしづむひとりの年の暮　舟月

『自註現代俳句シリーズ』より抜粋

第三期　『殿村莵絲子集』より

長良川雪待つ舟の白障子　昭和四六年作

岐阜の遠山は皆雪を被ている。鵜舟に障子が入れてある。明日辺り雪見舟になるらしい。夏の鵜飼冬の雪見とこの小舟は活動的である。

同　『深見けん二集』より

凩の吹きはじまりし海の紺　昭和三七年作

宿から燈台への道はかなりあった。風が激しく耳が痛いくらい寒い。ただ空は雲一つなく、海の紺は、例えようなく美しかった。

同　『村上しゆら集』より

雪囲終の住処の戸洩る灯よ　昭和三九年作

吹雪のはげしい津軽では、家のまわりに丸太を立て、藁や筵ですっぽりと家を囲ってしまう。わずかに残された戸口から、明りが雪道にながれる。

自註現代俳句シリーズ

第Ⅲ期　四十冊

赤松蕙子・磯貝碧蹄館・稲垣きくの・上野章子・浦野芳南・江口竹亭・大島民郎・大竹きみ江・勝又一透・加藤三七子・きくちつねこ・京極杜藻・草間時彦・近藤一鴻・貞弘　衛・佐野まもる・下村ひろし・下村非文・瀧　春一・瀧沢伊代次・津田清子・殿村莵絲子・鳥羽とほる・中西舗土・長谷川双魚・林　翔・原コウ子・平井さち子・深見けん二・福本鯨洋・細川加賀・皆川盤水・宮下翠舟・村上しゆら・村田　脩・村山古郷・八木林之助・山口草堂・吉田鴻司・米沢吾亦紅

（五十音順・敬称略）

装本、編集などすべて第Ⅱ期に準じます。
昭和五十五年六月発売以後　毎月三冊の予定にて刊行
一冊　八八〇円（送料二〇〇円）
全四十冊一括申し込みの場合　三万円（送料共）
一万五千円ずつ二回分割支払をご利用下さい。

〒一六〇　東京都新宿区百人町三―二八―一〇
申込先　社団法人　俳人協会
電話　〇三（三六七）六六二一番
振替　東京　六―二七三番

俳句文学館図書室利用案内

開館時間は午後一時から午後四時まで、休館日は水曜・木曜（日曜・祭日開館）です。

入室料百円。複写サービス一枚五〇円。二階閲覧室。

昭和五十五年十二月二十四日（水）より昭和五十六年一月八日（木）まで休館です。

俳書目録・俳誌目録・俳書追補目録各一部五百円送料二百円で頒布しています。